

『婆沙論』に見える聖言量と推理との関係について

前田 英一

1 序

仏教では論争術用語としての正しい認識根拠 (pramāṇa) について、古くから議論が行なわれてきた。正しい認識根拠を認識論・知識論の側から仏教徒が積極的に論じ始めるのは、ディグナーガ (陳那 ca. 480-540) の頃からである。彼は正しい認識根拠として、直接知覚 (pratyakṣa) と推理 (anumāna) の二種類のみを認める。認識の対象は自相 (svalakṣaṇa) と共相 (sāmānyalakṣaṇa) の二つしかなく、前者は直接知覚によってのみ認識され、後者は推理によってのみ認識されるからであるとディグナーガは説明している。

ディグナーガ以前の仏教では、直接知覚と推理、そして聖言量の三つが正しい認識根拠として認められていた。少なくとも無著の『阿毘達磨集論』まではこれら三種の正しい認識根拠が挙げられている¹。ディグナーガは聖言量を独立した正しい認識根拠とは認めず、聖言量を推理の一種として扱うことを明言している。彼にとって聖言量は、共相を媒介とする概念知であると考えられたからである。しかし直接知覚と推理のみを正しい認識根拠と認めるのは、ディグナーガ独自の考え方ではないようだ。彼より以前の世親 (ca. 400-480) も同じ考えを持っていた可能性が高いからである²。いずれにしても、聖言量を独立した正しい認

識根拠と認めないことから、世尊の教説の妥当性をいかにして証明するかという問題が、彼ら以降の仏教徒たちに課されることになった。この問いに対して本格的な検討を行い、解答を提出したのがダルマキールティ（法称 ca. 600-660）である。

ディグナーガの認識論を考えるには、彼以前の仏教やインド哲学諸派において展開された認識についての議論を考察する必要がある。この小論では、ディグナーガや世親が属した唯識学派に大きな影響を与えた、有部の『阿毘達磨大毘婆沙論』（以下『婆沙論』）を取り上げ、そこで論じられている正しい認識根拠、特に推理と聖言量についての議論を考察する。その結果、推理と聖言量の一つに結びつける考え方の萌芽が、すでに『婆沙論』に見られることを指摘したい。

2 『婆沙論』における聖言量の用例

『発智論』の注釈書である『婆沙論』では、直接知覚・推理・聖言量に相当する、現量・比量・至教量についての議論が随所になされている。ただしそれらに対する体系的な説明はなされていない。ある特定の議論を展開している際に、たまたま必要があったので付加されるという形で、正しい認識根拠についての議論がなされるのである。

まず最初に、『婆沙論』において聖言量が、独立した正しい認識根拠として扱われている用例をいくつか見てみよう。

云何知然。經爲量故。（『婆沙論』大正27, 230b27-28³, 496a1⁴, 572b29⁵, 692c11-12⁶, 984c16-17⁷）

云何が然るを知るや。経を量と為すが故に。

問彼依何量作如是説。答依契經故。(『婆沙論』大正27, 536c9-10⁸⁾

問う、彼何の量に依りて是くの如き説を作すや。答う、契經に依るが故に。

問彼由何量作如是説。答由聖言故。(『婆沙論』大正27, 612c9-10⁹⁾

問う、彼何の量に由りて是くの如き説を作すや。答う、聖言に由るが故に。

問彼依何量作如是説。答依至教量。(『婆沙論』大正27, 494a1¹⁰⁾
問う、彼何の量に依りて是くの如き説を作すや。答う、至教量に依る。

問應理論者依何量故説有中有。答依至教量。(『婆沙論』大正27, 356c25-26¹¹⁾

問う、應理論者は何の量に依るが故に、中有有りと言ふや。答う、至教量に依る。

しかし『婆沙論』には、聖言量を直接知覚や推理のように、一個の独立した正しい認識根拠として認めていないような記述が存在している。次にそれらについて検討してみる。

3 地神の認識に関連した議論

次の文章は、成道後の仏陀が五人の比丘に最初の説法をした時に、地神が声をあげてこのことを遍く告げたという経文を、『発智論』が引用して議論している箇所である。地神がどのようにしてその出来事を知ったのかを『発智論』は問題とし、『婆沙論』の作者はこれに対して正しい認識根拠の議論を展開する。『発智論』は、地神は正智見によってではなく、別の方法で仏の初転法輪を知ったと述べる。

(以下アンダーライン部分は『発智論』からの引用文)

如契經説、佛轉法輪憍陳那等必芻見法、地神藥叉擧聲遍告、世尊今在婆羅痾斯仙人鹿苑、三轉法輪具十二相。乃至廣説。……或有生疑、地神自有現量智見知如是事。欲令此疑得決定故、顯彼但有比量智見。生處得智、於轉法輪非現境故。由是因縁故作斯論。爲彼地神有正智見知佛轉法輪必芻見法不。答無。此事甚深非彼境界故。彼云何知。答由五縁故。一者信世尊故。謂佛起世俗心我轉法輪必芻見法。由是彼知。謂佛若起無漏心或未曾得世俗心、一切有情無能知者。若起曾得世俗心時、諸有情類有能知者。……今佛欲令地神知故、起曾得世俗心我轉法輪必芻見法。地神知已擧聲遍告。……二者或佛告他我轉法輪必芻見法。故彼得聞。謂若於心得善巧者佛起心已即能了知。若但於言得善巧者、佛告他已方能了知。問世尊何故告他令知。答世尊欲顯善説法中所言誠諦一見一樂、衆皆同許故告他知。(『婆沙論』大正27, 210a14-b26, cf. 『發智論』大正26, 926c15-21)

契經に説くが如し。仏、法輪を轉じ、憍陳那等の必芻法を見る。地神藥叉声を擧げて遍く告ぐ。世尊今婆羅痾斯仙人鹿苑に在りて、

三たび法輪を転じ、十二相を具う¹²と。乃至広説。

……或いは、疑いを生ずる有り。地神は自から現量智見有りて是くの如き事を知るかと。此の疑いをして決定を得せしめんと欲するが故に、彼は但だ比量智見のみ有るを顕わす。生処得智は、転法輪に於いて現境にあらざるが故に。是の因縁に由るが故に斯の論を作す¹³。

彼の地神正智見有りて、「仏の法輪を転じ、必芻法を見る」と知ると為すや不や。

答う、無し。此の事甚深にして彼の境にあらざるが故に。

彼云何が知るや。

答う、五縁に由るが故に。

一には世尊を信ずるが故に。謂く、仏世俗心を起こして、我れ法輪を転じ、必芻法を見ると。是れに由りて彼は知るなり。謂く、仏若し無漏心或いは未曾得の世俗心を起こさば、一切の有情能く知る者無し。若し曾得の世俗心を起こせし時は、諸の有情の類い能く知る者有り。……今仏地神をして知らしめんと欲するが故に、曾得の世俗心を起こして、我れ法輪を転じ、必芻法を見ると。地神知り已りて声を挙げて遍く告ぐ¹⁴。……二には、或いは仏他に告ぐ。我法輪を転じ、必芻法を見ると。故に彼聞くことを得る。謂く、若し心に於いて善巧を得る者は、仏、心を起こし已れば、即ち能く了知す。若し但だ言に於いてのみ善巧を得る者は、仏、他に告げ已りて、方に能く了知すべし。問う、世尊は何故に他に告げて知らしむるや。答う、世尊、善説法中の所言は誠諦なるをもて、一見、一楽、衆皆、同許するを顕さんと欲するが故に、他に告げて知らしむ¹⁵。

地神は正智見によってではなく、以下の五つの理由のうちのいずれかにより、仏の初転法輪を知ると『発智論』は説明する。すなわち、(1) 地神は仏を信じているので、仏が起こした世俗心によって知ることができた、(2) 仏が他の者に告げたのを地神が聞くことができた、(3) 大徳天仙から佛の初転法輪について、地神が聞くことができた、(4) 初転法輪に接した五人の比丘が世俗心を起こしたので、地神はそれによって知ることができた、(5) 初転法輪に接したことを、五人の比丘が他の者に告げたのを地神が聞くことができた、というものである¹⁶。結局地神は、仏や聖者の世俗心が言葉を介して、仏の初転法輪を知ることになる。これらの説明は、地神が仏の初転法輪を直接知覚（現量智見）ではなく推理（比量智見）によって知ることを主張するためになされたこと、『婆沙論』の作者は註釈している。『発智論』が挙げる二番目の理由「仏他に告ぐ」という語句を、世尊の言葉によって知ることであると『婆沙論』は示唆する。『婆沙論』において、仏の世俗心、あるいは仏が他者に告げたことに基づく地神の認識が、推理であると指摘されていることが注目される。

4 三十三天の認識に関連した議論

『発智論』は地神の認識の議論に引き続いて、僧侶たちが煩惱を滅して阿羅漢となったのを三十三天が知って称賛した、という主旨の経文を引用する¹⁷。三十三天がそのことをいかにして知ったのかがそこで問題とされるが、それについての『発智論』と『婆沙論』の説明の仕方は、地神の認識の説明のそれと全く同じである¹⁸。つまり三十三天は正智見

によってではなく、世尊を信じているからとか、あるいは仏が他者に告げたからなどという同様の五つの理由によって、僧侶たちが阿羅漢になったことを知る¹⁹。そして『発智論』は同じく、世尊を信じることにより知るとは、仏の起こした世俗心（『婆沙論』によると曾得の世俗心²⁰）によって知ることだと説明している。また、仏が他に告げたことによって三十三天が知ることを、世尊の言葉によって知ることだと『婆沙論』は示唆する²¹。結局『発智論』の説明は、三十三天が僧侶たちの阿羅漢となったことを、直接知覚（現量智見）によってではなく推理（比量智見）によって知ることを示すためになされたことと、『婆沙論』の作者は説くのである²²。

5 預流の聖者の認識に関連した議論

『婆沙論』の作者は地神と三十三天の認識をめぐる議論において、仏の言葉による認識を推理による認識と関連づけることを示唆しているが、はっきり言明するに至っていない。

仏語を推理と結びつけることを明言している記述は、預流の聖者は自分が三悪趣に堕ちないことをどのようにして知るのか、という議論に関連して出てくる。

如世尊説、我聖弟子、應自審記、已盡地獄傍生餓鬼嶮惡趣坑。乃至廣説。……有於此疑。諸預流者、於自己盡地獄傍生餓鬼等事、有現量智能正知耶。爲令彼知諸預流者、於前説事但由比量非現量知故作此論。諸預流者、爲有現智能自審知、已盡地獄傍生餓鬼嶮惡趣坑、而自記耶。答不能。若爾彼云何知。答信佛語故。（『婆

沙論】大正27, 653b8-22, cf. 『発智論』大正26, 980c26-29)
世尊の説くが如し。我が聖弟子は応に自から審らかに記すべし、
已に地獄・傍生・餓鬼の嶮悪趣の坑を尽くす²³と。乃至広説。

……此れに於いて疑う有り。諸の預流者は、自己の地獄・傍生・
餓鬼等を尽くす事に於いて、現量智有りて能く正しく知るや。

彼をして諸の預流者の、前説の事に於いて、但だ比量のみによりて、
現量により知るにあらざるを知らしめんと為すが故に、此の
論を作すなり。

諸の預流者は、現智有りて、能く自から審らかに、已に地獄・傍
生・餓鬼の嶮悪趣の坑を尽くすことを知りて、而して自から記す
と為すや。

答う、能わず。

若し爾らば、彼云何が知るや。

答う、仏語を信ずるが故に²⁴。

聖弟子は自己の三悪趣に堕ちないことをはっきりと知らねばならぬ
い、という主旨の仏説が最初に説かれている。これに対して『発智論』
は、預流の聖者は自己の三悪趣に堕ちないことを、現智によってではなく
彼らが仏語を信じていることによって知ると説明する。これら『発智
論』の説明は、預流が上記のような認識を直接知覚ではなく推理によっ
て知ることを主張するためになされたたと、『婆沙論』の作者は解釈して
いる。

『発智論』の場合、預流の聖者が三悪趣に堕ちないという知識の確実
性の根拠は、その説がまさに預流の聖者の信じる仏説であること、つま
り聖言量であることから求められている。しかし『婆沙論』の作者は、
そのことを推理によって知ることであると述べているので、『婆沙論』

の作者が推理と聖言量の間親近性を認めていることがうかがえる。

6 結論

『婆沙論』の作者は、仏説である聖言量を推理に含めると明言しているわけではない。「経を量と為す」とか「至教量に依る」という表現が『婆沙論』において出ているように、聖言量は一つの独立した正しい認識根拠として扱われている。しかし以上の三つの例から、聖言量である仏の言葉による認識を推理による認識と結びつける考え方が、『婆沙論』の中に既に存在していたと指摘できるであろう。ただ、この考え方がいつ頃出てきたのかを正確に知るには、『婆沙論』の成立年代研究の更なる進展が望まれる。

記号

—— (アンダーライン) 訓読及びテキストにおいて、註釈される原文に付加。

註

- (1) デイグナーガ以前の仏教認識論の発展史については、梶山雄一「仏教知識論の形成」(『講座大乘仏教』, 第9巻, 認識論と論理学, 春秋社, 1984年)参照。ダルマキールティまでの仏教における直接知覚の議論

の推移については、戸崎宏正「仏教における現量論の系譜」（『理想』、No.549, 1979年）参照。

- (2) 世親の『論軌』は、正しい認識根拠として直接知覚と推理の二つを挙げている。該当箇所の子ベット語断片とその独訳は、E.Frauwallner, *Vasubandhu's Vādaividhiḥ*, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 2, S. 18-19, 35-36, 1957 (= *Kleine Schriften*, herausgegeben von Gerhard Oberhammer und Ernst Steinkellner, Wiesbaden, 1982, S. 732-733, 749-750) 参照。聖言量について述べている『論軌』の断片はまだ見つかっていない。前掲戸崎論文, 105頁, 同註(22) 参照。
- (3) 『婆沙論』の旧訳『阿毘曇毘婆沙論』(437年に北涼の浮陀跋摩・道泰等により訳出)には、この語句は書かれていない(『阿毘曇毘婆沙論』大正28, 177b27)。
- (4) 「何以知之。經說……。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正28, 364b13)。
- (5) 「何以知之。經說……。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正28, 407c26)。
- (6) 『阿毘曇毘婆沙論』は、全百巻のうち前半の六十巻しか現存しておらず、該当箇所は散逸した部分に相当する。
- (7) 註(6) 参照。
- (8) 「問曰、彼何故作如是說。答曰、彼依佛經。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正28, 387c2-3)。
- (9) 註(6) 参照。
- (10) 「問曰、彼何故作是說耶。答曰、彼依佛經。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正28, 363a24)。
- (11) 「依何經說、信何事、言有中有。答曰、彼依佛經。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正28, 264b23-24)。
- (12) 引用される経文は例えば次のような箇所に見られる。『雜阿含經』

大正 2, 103c13-104a18, 『増一阿含經』大正 2, 618c17-619b12。

- (13) 『発智論』の旧訳『阿毘曇八健度論』(383年に東晋の僧伽提婆と竺仏念により訳出)と『阿毘曇毘婆沙論』の内容は、『発智論』・『婆沙論』と同じである。「又世尊言、此聞法已時地神舉聲放聲、世尊轉法輪於婆羅捺仙人鹿苑園中、若沙門婆羅門若天魔梵、若世間未曾轉、地神有此智知世尊轉法輪不耶。答曰不也。」(『阿毘曇八健度論』大正 26, 781b17-21)、「如説、世尊轉法輪、地神唱言、乃至廣説。問曰、何故作此論。答曰、爲斷疑故。人謂地神有現前了了智、知佛轉法輪、非是比相智。欲説地神無有現前了了智、有比相智、知佛轉法輪故、而作此論。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 157b18-22)。
- (14) 『発智論』や『婆沙論』にある「世尊を信ずるが故に」という語句は、『阿毘曇八健度論』と『阿毘曇毘婆沙論』には書かれていない。また、『阿毘曇毘婆沙論』には曾得の世俗心についての記述は無い。「云何知。答曰、世尊起世俗心、我轉法輪名某比丘見法。此彼知。」(『阿毘曇八健度論』大正 26, 781b21-22)、「問曰、轉法輪非是生得智境界、地神云何知耶。答曰、以五事故知。一世尊起世俗心故知。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 157b23-25)。
- (15) 「二者亦告他。問曰、佛何故告他耶。答曰、欲現善説法中所言誠諦故。」(『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 157c4-5)。
- (16) 『発智論』大正 26, 926c19-23, cf. 『阿毘曇八健度論』大正 26, 781b21-26, 『婆沙論』大正 27, 210b3-211a7, 『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 157b24-c28。
- (17) 『発智論』大正 26, 926c23-29, cf. 『阿毘曇八健度論』大正 26, 781b26-c3, 『婆沙論』大正 27, 211a7-13, 『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 161c10-11。引用の経文は例えば、『晝度樹經』(『中阿含經』大正 1,

422b23-c6) に見られる。

- (18) 『発智論』大正 26, 926c29-927a7, 『婆沙論』大正 27, 211a13-212b26。
『阿毘曇八犍度論』と『阿毘曇毘婆沙論』の記述の仕方も、地神の認識の説明の時と同様である(『阿毘曇八犍度論』大正 26, 781c3-8, 『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 161c11-162c11)。
- (19) 『阿毘曇八犍度論』と『阿毘曇毘婆沙論』には「世尊を信ずるが故に」という表現は無く、世尊が世俗心を起こしたことについてのみ言及する(『阿毘曇八犍度論』大正 26, 781c4-5, 『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 161c17)。
- (20) 『婆沙論』大正 27, 211a26-b3, 『阿毘曇毘婆沙論』には曾得の世俗心についての記述は無い(『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 161c17)。
- (21) 『婆沙論』大正 27, 211b8-13, cf. 『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 161c23。
- (22) 『婆沙論』大正 27, 211a19-23, cf. 『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 161c12-15。
- (23) 引用の仏説は例えば次のような経に見られる。『雜阿含經』大正 2, 273c2-5, 215c27-28, 216a13-14。
- (24) 『発智論』や『婆沙論』で「仏語を信ずるが故に」とあるところは、『阿毘曇八犍度論』では「世尊を信ず」となっている。「又世尊言、是謂世尊弟子、地獄盡畜生餓鬼盡盡不墮惡道。須陀洹有此智、悟我地獄盡畜生餓鬼盡、盡不墮惡道爲不自悟耶。答曰、不自悟。云何得知。答曰、往信世尊。」(『阿毘曇八犍度論』大正 26, 853a26-b1)。『阿毘曇毘婆沙論』の該当箇所は散逸した部分に相当する。